

杏林子の《山に想い水に想う》（翻訳）

谷 峰 夫*

《Shanshui Dadi》by Xing Linzi (translation)

Mineo Tani*

I tried to translate 44 parts of 《Shanshui Dadi》 by Xing Linzi into Japanese here.

Key Words (キーワード)

Xing Linzi (杏林子), Nature and man (自然と人生), Symbiosis (共生), Affection (慈愛), Prose Poems (散文詩)

人工的なものが幅を利かし、本来共生すべき自然は隅に追いやりられ後退してしまっている今の世の中である。実に嘆かわしいことだと思う。潤いを欠き心の痩せ細った世相になっているのも宜なる哉と言えるのではなかろうか。自然は人間の営みを映す鏡であると同時に人間の心の有り様に大きな影響を及ぼす作用体でもあるからだ。

自然と向き合い交流できるということは一つの能力だと私は常々思っている。この種の能力を有するか否かで人間を植物的人間と動物的人間に大別することも強ち乱暴ではないと考えている。ここに取り上げた杏林子という作家は自然と対話し花鳥風月を友とする喜びを知っている人であり、紛れもなく植物的人間の部類である。自然に全く興味を示さず、自然をつまらないと言って憚らない作家がいるが、彼女はこの種の作家とは対極に位置する人であると言ってよかろう。作家の作品にはその人の自然観が有形無形に反映されるものである。杏林子作品《山に想い水に想う》（原題《山水大地》）には彼女の自然に対する接し方が最も顕著に現れており、他の作品のベースにもなっていると考えられ、研究の手始めとして試訳

を行ってみた。見過ごしてしまいそうになることや何気無いようなものにも彼女の心が敏感に反応し詩の魂が躍動している点を十分味わってみようと思う。以下は全編の日本語訳である。

〔1〕回 帰

われわれはよく「自然に帰らねば」を口にする。だが、本当に帰ってゆくべきは天意に添う喜びの中であり、羨望や我欲を持たず、得失に一喜一憂しない恬澹な心の中である。上辺を装わず、虚飾を捨て去り、技巧を凝らすことなく、この上ない純真無垢な原始の心で天地と波長を同じくすることである。天地開闢にあっては人の生命と大地の生命は一体であったのだから。

〔2〕自然の懐へ

大地と親しく交わろうとせず、従ってそれから直接教えを受けようとしない画家に良い絵が描けはしまい。

異なる地形に異なる岩層構造、これが山の多様な姿を作り出している。険しくそびえるものあれば、柔和で気品を備えたものもあるし、奇峰が屹

*海上保安大学校 (Maritime Safety Academy)
呉大学非常勤講師

立するものあれば、高く雄大な山容を成すものもあるといった具合である。同様にして、流れや水質の変化で谷川となったり、湖となったり、あるいは大河となったり、海となったりする。帯状の緩やかな清流もあれば、鏡の如く静かな水面もあるし、猛り狂う荒波もあれば、果てしなくゆらめく波動もある。樹にしてもそれぞれ違った風格をもっているし、花にしてもそれぞれ違った容姿をもっている。斯くの如く、四季の変化、時の流れの中であって大自然は至る所で千変万化の様相を呈し、人間の目が追い付かないぐらいである。

山には山の、水には水の、そして木には木の、石には石のそれぞれ固有の表情がある。従って、それに近付こうとせず、観察しようとして、対象がよく分からないでいて自然の一挙手一投足が描けはしまいし、絶えず生起して止まぬ広大果てしない世界が描けるものではない。それは恰も人間というものが分からずして、つまり、人間のもっている感情や欲望、愛憎や恩讐、さらには生老病死という四苦が分からずして人間性が語れないのと同じである。また、人の群れに入ってゆかず、人の心に寄り添わず、生きるか死ぬかの苦難を経験せず、胸を抉られる思いをしなかった者に愛を語る資格がないのと同じである。

〔3〕天地の調べ

星を鑲めた夜空は一首のものの言わぬ詩であり、神秘的なきらめきを放つその美しさは人を魅了して止まない。

落葉樹は生と死、栄枯盛衰を語りかけてくれる小説の筋であり、人間性の奥の奥まで一つまた一つと知ろうとするに恰好で、そのためには自らの姿の細部まで惜しみなく人前にさらけ出してはばからない。

秋になると断崖や水辺に自生する葦はさながら散文である。一見その生え方は雑然としているものの、他から束縛を受けぬ自由がそこにはあり、悠々としてこだわりがなく気の赴くままである。

海はさしずめドラマといったところであろう。高遠にして深奥、推し量れないものを湛えた様に

は永遠性があり、不可思議なことこの上ない。夢心地のような優しさがあるかと思えば、猛獣の如き凶暴さもある。だが、それを知ろうが知るまいが一向にお構いなく海はその強くて大きな力で思わずわれわれを引き寄せ、その懷に取り込んでしまう。

〔4〕四季

四季の別がどんなにはっきりしていないところにいたとしても注意深く観察しておれば季節の変わり様は読み取れるものである。

春、雨が上がり晴れ間がのぞくや地表から水蒸気がうっすらと立ち上るのが見える。

夏、空気は滞留してむっとする暑さであるが、にわか雨の後は打って変わって清々しい気分になり、一種の心地よさが味わえる。

秋、人が最も好むこの季節は大気がさらりとしてどこまでも透明である。それは恰もこれまでにない明るく広々とした天地が突然変異のように現れた感がある。ひと風呂浴びて体中あせもパウダーを塗った時のようなすっきり感さっぱり感がある。

冬、それは痕跡をすっぱり包み隠して外から知られまいとする用心深さがあるが、寒気流の不意打ちで本当の姿が露呈する。冬の風は小さな錐でももっているかのよう、骨の髄まで応え、我慢できずに呻き声を発し、天を呪う粗野な言葉を放つ。だが、寒いけれども気持ちはしゃきっとし、頭脳は殊の外冴えるものだから寒さもこれまたいいものだと思えてくる。

ついでながら他人の心だって同じこと。その極めて微妙な変化や起伏もこちら側の気の配りようで察知できるというものである。

〔5〕夜

しんとした夜、静かに体を横たえる。周囲には微かな雑音もない。

大地の躍動する様を脈拍の如く感じ取るのはほとんどこんな時である。谷川のせせらぎが血管の中を勢いよく流れ、風が胸腔内を旋回するのが分かるし、青々とした草の匂いだってかぐことがで

きる。

甘美な夜は恰も一枚の羊毛布団がそっと掛けられたに似て、ふんわりとしたその暖かさの中で人を知らぬ間に夢路へと誘ってくれる。

〔6〕朝日の光

空はまだ暗く、虫の音も鳥のさえずりも聞こえない。溪流の水がざあざあ流れているだけで大地は依然深い眠りの中にある。

水が染み出るように日の光が厚い雲の層からうっすらと漏れ出す。すると次第に山はぼんやりながらその輪郭を露わにする。霧は夢の中をさ迷うが如くまだ林を包み晴れてはいない。鳥たちがひそひそ話を始める。喉を全開させての高らかな歌はそこにはない。ただただひそひそと話を交わすのである。それは起床したばかりの人が周りを気遣って静かにそっと行動するのに似ている。

窓を開ける。ひんやりした新鮮な空気がさっと流れ込む。よく冷えた炭酸水のように清涼感があり、甘い中にもぴりっとしたものが伝わってくる。胸いっぱい吸い込むことを数回やると肺の細胞が一つ一つきれいに洗い清められる。

白味を帯びたダーク・グレーの空はどんどん透明度を増し、霧はひと皮ひと皮剥かれるように消えてゆく。そしてついに青くきれいな顔が眼前に現れ、陽光はその目を急に大きくして一種の驚きをもたらす。

鳥たちは騒々しくなる。人の声や車の音がそれに加わり、いよいよ賑やかさがあたりを満たす。ここで自分自身に一声お早うと言ひ、神にも朝の挨拶をし、新しい日を与え賜うた天に感謝の意を表するのである。

〔7〕庭面のろうけつ染め

梅雨の後、庭面のセメントを塗り施したところには濃淡が異なり形もさまざまな苔が多く生える。とりわけ人が足を踏み入れていない辺りのものはその色が一段と鮮やかで、美しさも際立っている。

セメントの表面には長い間に不規則な亀裂ができて、そこに雨水が染み込むと恰も絵筆で輪郭を

描いたような線状の図案と化してしまう。遠くから見やればダーク・グレーやライト・グレーのセメント表面を疎密不揃いな苔が覆い、そこへ細かなひびを伝う水の文様が加わって庭面全体になんとうけつ染めの絵柄よろしく古風で品がよくぼかしの入った美が現出する。墨痕が残り、水に浸った様が眼前に広がるのである。

ふとこんなことを思った — 人生で詩にならないものがどこにあらうか。この世で絵にならないものがどこにあらうか。世界はそれを見るこちらの心次第で如何様にも姿を変えるものだ。 — と。

〔8〕山を想う

ある日の明け方、半醒半睡の中で鳥の鳴き声をふと耳にする。都会に多いスズメではなく、私が山でよく聞くガビチョウのそれである。音域が広く、節回しが実に巧みですこぶる心地がよい。

おぼろげな頭で夢でも見ているのではと思ってしまう。そのうちに意識がはっきりしてくると自分はいま紛れもなく繁華なところに居るのだと気付くわけであるが、同時に山を慕い想う気持ちが猛然と沸き起こり、自分がやはり山育ちであることをここで改めて思い知るのである。

そのガビチョウは鳥かご — それも目と鼻の先の — の中で鳴いていると思い、その声を頼りに外へ探しに出掛けたところなんと庭の樹に留まっているのが目に入る。山の中から遠い旅をしてここまでやって来たのだろうか、それともどこかの家から逃げ出して来た小さな脱走犯とでも言ったところであらうか。

この後、日を隔て、私が次第に俗事にかまけて山の音やその笑みのある表情を忘れそうになる度に決まってガビチョウが私の窓辺にやって来て鳴き声を上げ、私に山の記憶を呼び起こしてくれるのである。

〔9〕山水、この無情なるもの

絵と見紛うような美しい山水に向き合う時、常ながらその時の心境を形容し託すにふさわしい言

葉を無意識のうちに頭の中で探し出そうとしている。そしてああでもない、こうでもないと苦吟していると、眼前の山水の間からぼろりと望んでいた言葉が抜け出てくる。

山水は常に変わらずその場所にあり、昔から今に至るまで黙して語りはしない。人から賛美されようが貶されようが、好かれようが嫌われようが、受け入れられようが拒まれようが、そういうことに一切関係なく山水は常にその場所にあり、人の喜怒哀楽によって変化を見せるということは微塵もない。

山水そのものは本来無情である。有情なのは人の明るく透けた心である。その有情で無情に向き合うものだから、これが却って山水の本来の姿を貶めているのではないだろうか。私が言わんとするのは、もし自己の思惟思考や情感意識を深く掘り下げるならば人は自己を一つの型にして山水の世界に嵌め込めるのではないだろうかということである。

〔10〕長雨のあと

何日も降り続いた雨がやみ、久し振りに空が晴れる。

雲の層は相変わらず厚いものの光が射し込むや真珠の如き白さに銀粉めっきを施したような明るさが加わる。ときたま雲の切れ間から小さな青空が顔を覗かせるが、大気中に依然たつぷりと含まれている水分の所為だろうか、その青空もしっとり潤って見える。

昼近くともなると雲の塊は次第に解きほぐれ薄くなってゆく。すると空は極めて浅いグレーがかったブルーへと色が変わる。日の光は山の窪みに濃淡入り交じった陰影を残し、山は黄ばんだ緑色とインジゴ色の中にすっぽりと覆われる。明るい光線下で遠くの山もその輪郭がクッキリ浮かび上がる。

朝から続く鳥たちのさえずりはまだ止むことがない。

〔11〕真冬日

真冬日。

空は晴れておらず、曇ってもいない。全体がぼんやりとしたものに覆われている。雲のような雲でないような、霧のような霧でないような、どこまでも判然とはしない。

風はなく、雨はなく、虫の音も鳥のさえずりもない。天地はばかりと押し黙ったままである。山の木々は一種重苦しいまでの濃紺と暗緑の色を呈しており、それにいくらか枯れ葉色が混ざっている。夕暮れ時ともなるとそのおぼろげな様はいよいよ度を増し、遠くから見やればくすんだ墨の色に黄ばんだ画用紙といった古い絵が少しも人の目を引かないのと同じ感がある。

夜、灯りの下の自分に寒気が足の裏から次第に襲ってくる。書物の活字も冷たさから萎縮し出す。すると私は急いで布団の中に逃げ込み、夜明けまで体を横たえるのである。

〔12〕溪流の響き

静かな、どこまでも静かな夜である。

山中に降る雨も幾日目かに入った。夜のしじまの中で溪流だけがひときわ澄んだ音を響かせている。それにはほとぼしる勢いがあり、澄んだ響きとともに人の心を忽ちとりこにしてしまう。

山に起居すること十年。従って溪流の音を耳にすることもこれまた十年。それは時に軽やかな時に重く沈むような流れとなり、緩急織り成すその様は大いに聞く者の耳を楽しませてくれる。だが、一度ハイキングに出掛けた時に溪流のほとりまで下りて行ってすっかり興奮めしてしまった。それまで抱いていたものが無残にも打ち砕かれたからである。溪流は静寂の中にあり、流れの曲がり具合といい、ごろごろした多くの石といい、一見するだけのものはあったのだが、その両岸には石づくりのテーブルや腰掛けが所狭しと並んでいてこれがせつかくの野趣を台無しにしているのである。人は何故こうも山水に手を加え、自分の世界を持ち込もうとするのであろうか。山水の本来もつ姿のままにしておくのがいいと私は感じるのだが……。

それからというものの溪流のほとりにもう足を運ぼうとは思わなくなった。そこでこのように小さな住み処でその音を聞くことにしている。時の流れとともに近付き、そして遠ざかってゆく溪流の足取りに耳を澄ますのである。どこまでも安らかでどこまでも静かな夜を演出する溪流の足取りである。

〔13〕山を見る

山は目にする度に違った表情を見せる。

心中重く垂れこめるものがある時に見る山はどこか人を寄せ付けず、生気が失せ、全体にうらぶれた感を漂わせているが、気持ちが一転して晴れ晴れしたものになるや山の様相もがらりと変わり、流れるが如き滑らかな美しさでこちらの心に迫り感動をもたらししてくれる。自分の心の内は確かに変化し、それ故に山水の表情にも曇りと晴れの別が生じるのである。

心は物に従って転じ、物は心によって変ずるわけであり、このことは愛や怒りや恨みといった種々の情で雁字搦めになり自らを苦しませ人をも苦しめるということを招く根源になっている。もしもこれを乗り越えられたなら、山は山、私は私であって他の一方が入り込む余地はなく、お互い関わることをしなくなるわけだが、そうすると今度は情も味も欠如した全く素っ気無いものになってしまうから何とも厄介である。人生の難しさたるやここに極まれりということになろうか。

山を見るは己を見ることに外ならず、月を愛でるは結局のところ己が心を愛でていることになるわけである。

〔14〕月の出ていないこのような夜は

中秋の夜。小雨がやんだばかりで、星も月も出でおらず、山林には一面薄らと霧がかかっている。殊の外清々しく、静寂が辺りをすっぽりと包んでいる。

偲ぶということにふさわしいまたとない夜である。離れていて久しく会っていない友人知人を想い、未だかなえられぬ思慕の情に浸る格好の夜で

ある。人が私に済まないことをしたとか、私が人に申し訳ないことをしたとか、いずれにせよそれらはこの世からきれいに消え去ってしまっている。悔いもなければ怨みもなく、残念がる心とてもない。あるのはささやかな感謝の念であり、ちょっぴりうれしく満ち足りた気持ちばかり。生命というものが全き姿を呈するのはこのような境地を悟りとして体得する正にこの一刹那においてである。

思うに、天地それ自体に不足ということがあったであろうか、歲月それ自体に恨みがましいものがあつたであろうか。この世における是と非、恩と仇、悲しみと喜び、別離と出会い、こういったものも所詮は人自らが自分を痛め傷付け、自ら苦しみ、自ら憂えていることの表出に過ぎない。この点が分かれば自然と束縛から解き放され、心身は爽快になり、胸の内に何ら引っ掛かることがないといった状態になれる。

ありがたい今宵、暫し多くの顔を次から次へと思い浮かべてみる。思い出の中の顔はいずれもよく知っていて温か味があり、昔のままに円やかな芳香を放っている。偲ぶ心あればお互いの気持ちはぐっと近づくものである。

〔15〕シルエット

ナンキンハゼの葉が古びたレンガ塀に幾重にもなって影を落としている。パツと明るい緑色が殊の外映えて、まるでレリーフの如き凹凸をつくりそれが趣を誘う。

塀は長年雨風の浸食を受けて黒ずみ、それに汚れが加わり、苔の跡のまだら模様もあつてどう見ても美しさとは無縁である。しかし、その洗い清めたような新鮮で爽やかな命の引き立てがあつて塀の古さにも味わい深きものがにじみ出ている。誠に歲月は移ろい激しいものではあるが、転変のあとには安穩と静謐があるものだ。青葉は風に揺らめき、舞い動く。そして生じては散り、散っては生じるを繰り返す。このことは自然の為すがままに任せるとしよう。私としてはこの風景を切り取って窓の格子と自分の心の中にしっかりと張り付けておこうと思う。

〔16〕想念の翼

こうして窓の前に座り、机に書を広げ、手元には原稿用紙を置いているのだが、頭の中からは字の一つも跳び出してはこない。尤もだからと言って一本の神経、一つの細胞も刺激したくはなく、このままの状態を望むわけではあるが。

窓の向こうには青い空が広がり、眉墨の如き色を成す山を陽光が滝のように天からどっと流れ落ちて来る。谷間には一面きらきらと光が踊り、水玉が顔を打ち付ける痛さを感じ取るほどである。心中には一種の得も言われぬ情趣が出来上がる。優しさ、肌理細かさ、柔和で曲折を帯びた様、これらがいずれもこの上無き程に混然一体となっていて、これを詩にしたり、音楽にしたり、或るいは酒のようなものに醸造したりすることができそうな思いに捕らわれる。

ほんやりとながら自分の仕事に精を出すべきだ、何か有意義な事をすべきだと思いはする。時間は貴重であり、浪費が許されないことは分かっている。だが、恋人の呼ぶ声を耳にした時に心は抗しようがなく、抗する気もなく、それについつい誘い込まれてしまうのに似て自分の思いのままに一切を任せるのである。何ら目的というものをもたぬまま生命の自由な流れに身を任せ、自身の命の小川を形成するのである、それが美しいものか否かは別にして。

このよく晴れた午後、果てしなき静けさの中で窓に向かい、自己の生命を思う存分心の奥底に伸ばし広げてみよう。

〔17〕互いを慕い思う五月

これまで相思樹を間近に見るということがなかった。五月の山中にあちこちで群れをつくり、こんもりと密生する相思樹は濃淡相交じり、浅いものから深いものまで各種の黄色が織り成す光景を見せてくれるが、これはすべてその小振りの花が為せる業であることを今日初めて知ったのである。

どの相思樹も大豆とさほど大きさの違わない毬形の花で透き間なく埋め尽くされているが、その花の数は一体どれぐらいになるのか想像もつかない

いほどである。毬形の花はどれも色の付いた小さな点状ながら、枝葉の生い茂る樹にあつてこの小さな黄色い花の存在感は実に強烈で全体を引き立たせるに大いなる力をもっている。それは一枚の湿った画用紙に黄色を一筆塗るとすぐさま周りに広がってぼやけた黄色に包まれるのに似ており、塗った色がまだ乾かずに水気をたっぷり含んだ感じが伝わって来るかのである。

五月の山は画家が何気無く残していった一枚の下絵を思わせてくれる。

〔18〕山の移ろい

山は多様な姿を見せてくれる。

直射日光の強烈な正午。山は稜線がくっきりと浮かび上がり、陰影は濃く鮮明である。陽光をいっぱいに浴びる樹木はさながら緑色の水彩用絵の具が溶けずに固まってしまったかのよう。この時刻の山はシルエットがはっきり現れて一際精彩を放ち、他を寄せ付けず、世に並ぶ者なしといった威勢のよさが感じられ、強靱で堅固な様に揺るぎというのが全く見られない。

夕暮れ時。光線にそれまでのような鋭さはなくなって、山の色合は柔らか味を帯び臃ろげなるものが加わってくる。光のつくる影は黒っぽさを増し、入り日によって山に自然なほかしが入ると山は女性のように優しくソフトな表情へと変わる。

雨中にあつて。山は雲霧が立ち込めるが、その様には思いやりの深さに次々と恨み悲しむ情がまといつくといった趣が強く見てとれる。雨に咲く梨の花と同じ哀れをここでも感じるのである。

一年を通じての山は季節や気候の変化によって、また光線の濃淡や強弱によって、或るいは剛の、或るいは柔の表情を見せるし、爽やかな姿の時もあるればすっきりしない姿の時もあるというように実に多様である。

〔19〕自然の音色

その一

野山には落ち着いた静けさの中にもそれなりの賑わいがある。音がしていないと思ってもどうし

てどうして結構色んな音があちこちからするものである。風の音や水の音があり、虫の音や鳥の鳴き声がある。音質なり音域なりはそれぞれで異なっていて、高く響き渡るものあれば、おおらかでゆったりしたものもある。リズムカルな感じのものあれば、太くて沈んだ感じのものもある。緩やかなテンポのものあれば、速いテンポのものもある。剛と柔が織り成し、上がり下がりやポーズにも少なからぬ変化がある。

これらの音はすべて合わさって一筋の音の河となり、広大無辺の時空を流れるのであり、それを妨げるものはない。それはもともと野山の一部を成すものであり、その音にはっと気付いても何ら不自然さは感じない。野山の静けさを唯一掻き乱すのは人であり、人の声であり、人の引き起こす揉め事である。

その二

これ以上ない静けさの中にあってもちょっとした音を多く耳にすることができる。

風が木の梢を掠める、鳥が羽ばたきをする、溪流が岩場で小さな水しぶきを立てる、これらはいずれも音となる。そして空気の流れさえもが…。

もっともたとえこういったものが何もなかったところでやはり音は存在する。その源は自分の心の奥底にある。そこで命の営みや思考の働きは周波数を持ち、その音を静けさの中で聞くことができるわけである。

〔20〕雨 蟬

蟬の仲間にどうやら雨の日が特に好きだというのがいるようだ。

雨が降り出すと鳴き始めるのである。その鳴き声は一種独特な暗号を思わせる。ズー！ズーズー！ズーズーズー！ズー……。これは私に何か特別なことを知らせようとでもしているのだろうか。

それとも雨水の清涼感を伝えるシグナルなのだろうか。あるいは相方との歌のデュエットなのだろうか。いや、すべては私の考え過ぎでそのように聞こえるのかも知れない。人が入浴中無意識のうちに歌を口ずさむように一種うれしい気分の純

粋な表れであり、生命の自然な発露だというただそれだけのことも知れない。

私はこの種の蟬を何と呼ぶかは知らず、勝手に雨蟬と名付けているのだが、先方はこの呼び名に異を唱えたことはない。

私はこの雨蟬が好きである。雨の降る中で歌うこの蟬が好きである。その歌によって一面を覆う暗鬱さがきれいすっきり吹き飛ばされてしまうのだから。

〔21〕来 客

パタパタという軽い羽撃きに驚いて眠りから覚めた。目を上げて見ると小鳥が一羽網戸に留まっている。くりくりした黒くて小さな両目は微動だにせずこちらの方を見詰めている。小鳥を見ている私という存在に別段びっくりしている様子もなく、逃げ出そうとはしない。

これまで一羽の小鳥とこうも間近で接するということはなかった。木の梢や草地でとびはねたり、家の軒や電柱に留まっているのを遠くから目にするだけというのが常であった。それが今このように近くから見ると、青みがかった灰色の胸と腹が波打っているのが分かるし、その息遣いまではっきり耳にすることができる。小鳥は鳴き声を発することなく、じっとして動こうともせず、私が語りかけてもてんで相手にはしない。ただその小さな頭を傾けてこちらをじろじろ見るばかりであり、そこからは子供のような好奇心といったずらっぱさが十分に伝わって来る。一羽の小鳥に信頼され、こうも近寄らせることができて満更でもない喜びとほっとした気持ちに心が満たされる私である。

およそ十五分ほど経過した頃だったのだろうか、他のことに気が移ろうとして注意をそらした瞬間、その小鳥は両方の羽をちょっと広げたかと思うとちょうど晴れた空が雲をひと消しするような早業でさっと私の眼前から消え失せてしまった。先程までと違い元の何もない状態に戻った網戸へもう一度目をやってみたが、いささかぼんやりした気分になってしまい、今の今まで本当に一羽の小鳥がここに居たのであろうかという思いに強く捕ら

われるのだった。

〔22〕その鳥の声に耳を澄ます

冬の寒さはすでに去ってしまい、世は春である。暑い夏にはまだかなり間があるが、それへ向けての準備はもう始まっている。雨は上がりちょうどいい天気になった。鳥たちにとっては絶好の季節の到来である。

鳥の種類がどれくらいあるのかは知らない。また、鳴き方を聞いてもそれがどの鳥であるのかが分からない。全く疎いのである。鳥の姿を目にしないで過ごすことが多いぐらいだが、それでも鳥の鳴き声だけは毎日聞いていてこれが日課のようになっている。

鳥の鳴き声は概して非常に美しいと思う。その中には例えば、全山にガラス玉が転がるような感じの声がある。丸みを帯び、艶っぽく、しかもデリケートで脆く、四方八方にころころ動き回り、当たっては跳ね返るといふそんな形容が似合う声からは子供のようないくささと軽快さが伝わって来る。また、絹織物を思わせるようなすべすべして柔かく滑らかで、一種鮮やかな色彩が感じ取れる声というのもある。もっとも、こういう類いばかりではない。鳥によっては何かで鍋の底を摩擦するような声を出すものがあるし、でなければガーという一声で不意打ちを食わせるものもある。それがとりわけ物音一つしない静まり返った時に発せられたりするとこちらはハツとして身が竦みそうになってしまう。

大雑把に言うと、山鳥の鳴き声は割と高くてよく響き、節回しもいいし音階が多いのに対し、水鳥のそれはやや低目で小さく、野太い嘎れた声で、毎朝うがいの際に出るゴロゴロという音に似ているものもあるという具合になろうか。

鳥のなかには歌うことが好きでたまらず、まるで途切れることのない水の流れのようにしばしば一、二時間ぶっ続けで歌うというのがいる。その声ははっきりとして明るく、軽やかで伸び伸びしており、水の如き柔軟さとしなやかさを持っていて、聞いているうちにすっかり引き込まれてしま

い得も言われぬ気分になる。そして生命がこんなに素晴らしいものであることに思わず心が喜び弾むのである。

後日知ったのだが、それは相思鳥というのだそう。この鳥は雄が相手方の雌の姿を目にできない場合に限りあのような切羽詰まった鳴き声を発するということである。そこで人によってはその声を聞きたいばかりに雄を雌からずっと隔離し続けるのだそうである。うれしくて歌っているのだとばかり思っていた私だが、見当外れであった。

それ以降というもの、鳥のさまざまな鳴き声に対しては如何なる注釈も加えず、一人の純然たる鑑賞者に徹して耳を澄まし聞くだけにしている。自分を過ちから守るためと心得たのである。

大自然が人類に期待するところのことはおよそこのようなものではなかろうか。

〔23〕山彦

人類にとって最も原始的な音と言えはそれは野山に求められよう。野山は懐かしい音のふるさである。

私は山に戻る時、バッグの中はいつでもできるだけ少なくし、余計なものは詰め込まないようにしている。大都会での義理や人情、生活面における卑俗さや忙しさ、複雑に絡み入り組んだ思想、こういったものはすべて置き去りにしてくるのである。そうして心を純にした状態で山と親しく向かい合い、山の声に耳を傾け、山彦を人の心に吹き込ませるのである。最も直接的かつ最も原始的な形で。

〔24〕雨降る夜

雨の降る夜。雨水にも屋根に落ちるあり、地面をたたくあり、溝に入って流れるあり、木立を洗い清めるありで、それぞれによって音も異なるものの、それらの音が疎になったり密になったり、遠のいたり近付いたりしながら次第に寄り集まって一つの音速障壁をつくりあげてゆく。すると他人の声や車の音はそれに遮断されて中に入って来れず、ついには雨音に包まれた自分一人だけの世

界が出来上がる。

このような夜は孤独感を募らせる一方で胸を熱くする甘美な雰囲気も併せ持っていて人はふと涙を流したくなるものである。それは寂しさや悲哀から来るのではなく、この秘密めいた時間の中で心が完全に解き放たれ、感ずるがままを表に出すことができ、身構える必要とてなく、ただ純粹かつ素直に最も自分らしい自分に向き合えることから来るものである。ちょっぴりうれしく、ちょっぴり物悲しく、そして何かを失うようである何かを得るような一種の恍惚感も少し加わって涙が自然に流れ落ちるに任せるのである。

ひとしきり涙を流した後の両目は殊の外綺麗に澄んで愛くるしく、魅力的な輝きを放つこととなる。

〔25〕美しさを伝える術なくて

何故か早朝にふとそれを想う。たびたび脳裏から浮かび上がるその名前を……。

今朝のそれ——山——は格別美しい装いを見せてくれるかも知れない。雨が降っているものだから霧が出ていて、その霧は溪谷や木立から糸を引いたように立ち上り、山の上半分をすっぽりと覆っているだろう。山は見え隠れし、すっきりした姿と濁りの掛かった姿が交互に現れよう。近くは依然ぼんやりした深緑に包まれていても遠くの方は青味を帯びた白い空に連なりそれと一体を成しているだろう。ごく軽いタッチで鉛筆を走らせ、消え失せそうなまでの淡い一本の線で山の輪郭を描き出したかの感をそこに見るのである。誰かが置き忘れたかのような一枚のデッサンを思わせる趣をそこに見るのである。

この美しさはどのように伝えたものやら分からず、心の底でそっとそれに呼びかけるばかりの私である。

〔26〕花の香芳しき夜

連れ立って歩いていると前の方からぶーんと花の香が漂ってくる。近付いてみれば静かな庭園の一角にモクセイの木があり、そこから放たれて

いるのである。細かく砕け散ったような可愛い花々は夜のとばりに包まれて象牙色を呈し、透明で小さな多数の光点を連想させる。仄かな香りはさしずめ光線の束であり、四方へ放射状に広がってゆく。

一切は静寂の中にある。夜は動きを止め、樹もじっと動かない。花の香にしてもこれまた然り。ただ私達が動くとき流に伝わるものだから花の香はそれに乗って浪の如くひたひたと押し寄せ、この静止した夜を波立たせているに過ぎないのである。

〔27〕青 春

住んでいた山を去年離れる時、窓の下にある桐の木は落葉が終わったばかりで、横に寝た状態の枝に風情というものはまるでなかった。それが今年戻ってみるとカワセミの羽で飾った天子の車を思わせるような見事なまでの緑であり、しなやかな枝はゆらりゆらりと揺れ動いており、若さと生氣が殊の外みなぎっているのである。

草木は青々とし、毎年繁茂するというのに人の両鬢の白いものは何故もとの艶々した黒髪に戻ることはないのであろうか。皺の出来た額は何故もとのすべすべした潤いを取り戻すことができないのであろうか。

桐の花の盛りは極めて短いものの毎年錦の如きあでやかさを放ついつときがある。だのに人の青春は去ってしまえばそれっきりなのは どうしてだろうか。もう二度と帰来ぬあの日々は一体どこへ行ってしまったのだろうか。

天地は老いず、老いるのは人の心である！

〔28〕桐の花

五月の桐の花を見るとどの樹にもみな白い雪が覆い被さったあの北国の光景をどうしても連想してしまう。重みに耐えられない程ずっしりとたわわに花を咲かせている様がそう思わせるのである。

晴れた日と雨の日とでは桐の花の趣は異なっている。太陽が照っている時のその花卉は白くてぱつと美しく、光が屈折する下では限りなく透明に近

くなり、さながら熱の蒸発によって気体に化しそうな観がある。

雨中の桐の花は雨水をたっぷり吸ってぼつてりと重く、熟し切った梨が汁を十分に含んでいるに似てちょっと触れてみただけでも中の水分がすっかり流れ出そうな様相を呈している。

桐の花は白きことこの上無く、周囲の一切の色に目がゆかなくなる程際立った白さである。

桐の葉は秋に打ち続く小糠雨の中で次第に萎れ遂には枝から落ちてゆくが、恰も水に浸したクレープペーパーのようにびっしょりになってくっつき合い垂れ下がる葉は薄汚い感じがするもので、その姿からは五月にあれほど清楚な白い花を咲かせ汚れの世に超然としていたことがうそのようである。人が好むと好まざるに関わらず大自然はそのよいところもよからぬところも、美しい面も美しくない面もすべて曝け出すものである。

三月になると桐の木は芽を吹く。新芽は一つの小さな拳状を成すが、それは遠くから見るとまるで萼が開いたようでもあり、草緑色をした梅の花が咲いたかのようなでもある。凜とした高い品格を有し、横殴りの風と小糠雨の中、放たれた香りが突如こちらを襲うかの如き感を抱かせる。

〔29〕語りかける樹

私の庭にあるこの落葉樹を好まない人がいる。汚いと言っては嫌い、醜いと言っては嫌う。確かに萎れた葉が数枚裸になる前の小枝に掛かっている様は落魄れた感じを与えるし、退廃的な匂いがするものではある。

だが、私は好きだ。落葉しない樹は色あせることのない緑というイメージが定着してしまっていて、このことが生い茂った背後に潜むものを見落とし勝ちにさせる。それは時としてまるで立体風景画カードのようであり、庭や窓の前方は目に入ってもその奥にあるものは目に入らないという、それに似ている。

一方、私の好きなこの樹は落葉という現象があることによりその存在を驚きと恐れの入りが交じった気持ちで受け止めることができる。葉が生じて

落ちるまでには季節の移ろいがあり、生命の組み替えがあり、栄え衰えるという自然の流れがあり、こういった一部始終を実際目の当たりにすることができるわけである。

これは差し詰め語りかける樹ということになるのか。

〔30〕落葉

冬も終わろうかという頃になって葉が落ち出した樹がある。枝には枯れて黄色くなった葉があるかと思えば、未だに青味を残す葉もある。さらには、まるで血のような鮮やかで濃い色をし、樹全体の養分を吸収してもなお足りないかの如く地中の滋養分まですっかり自分のものにしてしまおうとする葉もあり、冷たい風に吹き付けられて多くの枝葉が弱り果てている樹にあってその凄まじい生命力にはただただ目を奪われてしまう。

狂いの無い確かな目で言えば、鮮紅色が際立つこの種の葉というのは他のものより厚みがあり大振りだ。セメント地に落ちる時カシャと音がする。また、夜にはしゅっしゅの音ながらパタッという音でその葉の存在を知らされるが、これは枝先から離れて落下する場合でも丁重さを失わないでいることを告げている。

全部掻き集めた落ち葉は花壇に入れ、雨が濡らし風が吹くに任せているが、来春樹が新しく芽を出す時にはそれらが一体葉であるのかそれとも泥であるのかが分からなくなっていることであろう。

〔31〕マンダラゲ

山の斜面にマンダラゲが一本今を盛りと咲いている。とてつもなく大きな葉とラッパ形の白い花が斜面の頂から真っ直ぐにぶら下がっていて、遠くから見ると恰も緑の滝に白い波しぶきが跳ね上がっているかのようなのである。水がどーっと落ちる音こそ聞こえはしないものの、ほとぼしる勢いというのがそこには感じられる。近くまで行ったわけではないが、それがもつ迫力はこちらに十分伝わってくる。大気を激しく突き動かし流れ出る迫力である。仄かな香りがまたいい、それはあたり

に漂い、静かにじわっと押し寄せて来て山道の両側を包み込む。

〔32〕 樹は鳥の棲み処

一羽の雛鳥が或る樹の前に落ちて死んでいる。樹には鳥の巣があるんだということをその時はじめて気付いて驚く私である。頭を上げてどこなんだろうと探すのだが、うっそうと枝葉が生い茂っていて容易には分かりそうもない。

午後の間ずっと母鳥が悲しみに沈んだ哀れな声で鳴きながら空中を旋回している。実にゆっくりした飛び方で、人が近付こうが避けも逃げもしない。ただただ傷心を抱いて鳴き声を発するばかりである。こちらとしては邪魔立てしようという気は毛頭ないが、かと言って慰める術も持ち合わせていない。

春ともなると樹の高さはかなりなものになり、この辺では最も目立つ存在となる。確かに樹は大きくなればそれだけ風当たりが強くなるもので、風が出ると樹の幹は左右に揺れ動き、それまでの平穏さがすっかり失われてしまう。そこでいっそのこと樹を切ってしまうということにいつもなるのだが、樹の中に隠れている鳥の巣のことを思うとどうしても二の足を踏むのである。台風季節がもうすぐやって来ることが分かっているながら、もう少し待って小鳥が大きくなってからにしようと思ってしまうのが常である。

〔33〕 樹を切る

樹はやはり切ってしまった。

台風襲来の夜、激しい雨風の中でもがき苦しみ呻き声を上げる樹からもう持ち堪えられそうもないという悲鳴が聞こえ、一晩中ずっと気になっていた。根ごと倒れて家がすっかり潰されでもしたらと恐怖心に苛まれた。であるから、台風が通り過ぎて取り掛かった最初の仕事は樹を切ることであった。どうしても切らないわけにはいかなかったのである。樹は暴風のために倒れているものもあるし、歪んでしまったものもある。散乱した枝や残りの折れてしまった枝が庭に横たわって通り

道を塞いでいる。

切るからにはこの際一本も残さずきれいに全部切ってしまうと思いそのようにした。すると、これまで生い茂っていたことで視界が遮られていた庭が急に広々とした感じになった。そこに切ったばかりの枯れ枝が陽光に晒されてぽつんと在る光景というのは古い廃墟を思わせ、その荒れ果てた中に漂うどことなく侘びしい様はある種の奇怪さを覚えさせてくれる。思うに、生命というのも緑濃き葉がもつような漲る力や生き生きとした輝きを失えば、今日にしているが如き光景同然になってしまうのであろうか。

〔34〕 木を切るじいさん

木を切りに来たじいさんとそのことで図らずも遭り合ってしまった。

私としては木の梢を少し切るだけでよいと思っている。木が大きいと風当たりが強くなり、台風が来れば危険なのでそうならないためにというつもりでしかない。だが、じいさんの方は違う。のこぎりを手にすると少しの情け容赦も無くどんどん切りまくる。すると緑の枝や若い葉が次々と地面に落ちてゆく。私は切羽詰まった声を上げて止めるように言った。庭の木陰が好きで真夏のひんやりした感が気に入っていることを話した。でも、その偏屈じいさんは木を切る手を休めず、すべての枝葉をきれいさっぱり切り落とすつもりでいる。私には丸裸になった木というものをとても想像する気になれず、醜くなった姿を白日の下に晒すそれをなおも木と呼べるであろうかと思うのである。

私はとうとう怒りを爆発させてしまった。金を渡して切ることを止めさせた。じいさんもかっとなり、その金を投げ捨て枝を切り残してくるり身を翻すや帰ってしまった。本当のところを言うと私達のどちらも間違っているわけではない。私にあっては、一方で客観的な環境上の制限に合わせなければならず、その一方で木としての完全性及び美観を極力守ろうとすることに拘ったわけだが、じいさんにあっては木を切るという自分のその仕

事にあくまでも忠実たらんとしたまでで双方どちらが悪いというわけではない。一本の木を切るということだけでも人と人の中にはかくも通じ合わないものがあるのだからその他のことについては尚更であろう。

〔35〕秋に生る実

秋は果物が実を結ぶ季節であり、樹は鈴生りで遠くから見ると実の数が紛れもなく葉より多いといった有り様である。

ある種の果実。それは落花生の実よりやや大きく、色は最初のうちが緑色、その後次第に黒褐色に変わり、そうなったところで成熟という段階を迎えるのだが、その成熟した果実には招きもしないのに小鳥がたくさん群れ集まって来る。よく目にするスズメではなく、スズメより少し小さな暗緑色の背中と黄緑色の腹をもつ鳥である。実が豊富にあるものだからどの小鳥も十分に食しほとんど球形に近い太り様である。その姿に憎らしさは無く、不器用な中にはのぼのとしたものを感じさせるほどである。果実は外が堅い殻で出来ているため小鳥は嘴でつついて中を開け実を食べる。食べ終わると捨てられた殻で地面はいっぱいになり、瓜の皮を敷き詰めたような趣を呈する。その上を歩くと冬に薪を燃やす時のようなパチパチという音がする。

実を食べ終わってしまえば小鳥たちは飛び去ってしまう。すると樹はまたもとの沈黙し通す状態を取り戻す。

〔36〕主無き果樹園

もとは誰が所有していたものであろうか、今は主のいなくなってしまった果樹園がある。園内のレンギョウの木は実が枝もたわわに生っていてまるで臨月の近付いた産婦を思わせる。自らの重さに耐えられなくなって低く垂れ下がった様があったり一面を覆っている。すっかり熟し切った実は静かに地に横たわり、あとは腐ってゆくだけである。土はこりと化し、大地に帰る時を待っているのである。

しかもこのすべては静々と進行する。果樹は花を咲かせ、実をつける。生ずるのが自然なら終わりに至るもこれまた自然であり、その摂理の中で自らの命を盛んならしめるのである。翻って人間はどうか。人は自分が大地を斯くも踏みにじり、神の御心に背いたことを恥じ入り、堪え難き悔恨の情に苛まされるというのが常である。

〔37〕鳥の巣

庭の手入れをしていた隣人が捨てられてある鳥の巣を見付けたと言って私のところに持って来たので手に取り興味深く観察してみた。

鳥の巣は子供の拳大ぐらいでしかなく、口の深い缶の如きものであり、極めて柔らかく細い蔓草と枯れた野草が用いてあって一層また一層とそれらが纏わり付くようにつくってある。手の入れようたるや実に巧みで見事なまでの出来だと言える。おもしろいことに巣の底の部分には青色の繊維が敷き詰められているものだからよく見たところ何とそれは網戸のナイロン糸だった。小鳥に色を識別する能力があるのかどうかは知らないが、何故他の蔓草や枯れた茎と混ぜ合わすことをせず、しかもただ巣の底にだけこのように敷くのであろうか。探究価値のある深く考えさせられることがこの時どっと頭をもたげたかのようなのだが、然りとてどこからそれを始めればいいのかも分からないでいた。

するとどうであろう、傍らで一緒になって見ていた子供が嬉々として言ったのである。「ほら！小鳥が自分用にカーペットをこしらえているよ。」私はこの言葉にはっと驚いた。大人というのはいろいろ考え過ぎて事をかくも複雑にしまっているのであろうかと思った瞬間である。

〔38〕人生は川の流れに似て

夜の川の流れは一本の黒いシルクの帯を思わせる。それは微かな光を受けてきらきらと輝きを放ち、得も言われぬ柔和で静かな趣を湛え、この上無く肌理が細かくすべすべと滑らかな感じがする。実際流れているのかいないのかそれがほとんど分

からないぐらいでさえある。生命の軌跡というものも正しくこれと同じでゆっくりゆっくりとした流れを成す。そこでは多くの悲しみや喜びが入れ替わり立ち替わり現れ、数知れぬ生と死の輪廻が次から次へと繰り広げられる。風穏やかで波静かな時もあれば、凄まじい勢いでうねり逆巻く時もある。どっと一気に千里を行くこともあれば、陰しく曲がりくねった所を難儀しながら進むこともある。だが、私達はそれらを悉く通り抜けてゆくものである。尤もその途上では辛く悲しいことや苦しく胸の痛むことが多く付き物であり、涙を涸れる程流すことも避けられないし、また逆に喜びや賛嘆に打ち震えることも少なからず経験するわけではあるが。

私達は高い山を越えもし、田野を難無く通り過ぎもする。時には一人で駆けずり回り苦労することもあれば、時には他の川の流れと一緒に進んで進むこともある。川沿いには自ずと見終わることのない風景が続いており、それには美しいものもあれば醜いものだってあるし、清らかなものもあれば濁り汚れたものだってある。だが、いずれにせよ、それへの愛着心、憐憫の情、どのようなものであれ良しとする泰然ぶり、これらが些かでもあらねばならない。私達には選択の余地というのがなく、めいめいの川を流れてゆくわけだから、そのゆっくりゆっくりした過程にあって己の川の流域を心の中に受容することを学び、己の愛をそれに注ぐようもってゆかねばなるまい。

〔39〕山を見ざる者

自分の存在を示すために山に入る時も喧騒を持ち込む輩がいる。そうでもしないと寂しさに襲われるかのようなのである。山に向かいて来たことを告げた彼らは大いに飲み食いし、さんざん馬鹿騒ぎをしてダァーと立ち去ってゆく。そのあとは山のようなゴミである。

続いて彼らは他人にもそして自分自身にも山を見てきたと語るのであるが、実際のところ最後まで何も見てはおらず、何も目に入っていない。彼らの誰もが心の行き場を失っていて、山水の内

にも外にもその置き所を持たないわけである。

〔40〕賑わい

大屯山の頂上に立てば台北盆地全体を一望に収めることができる。

左手には青々と樹木の茂る山が起伏し、腕で台北の街を懷に抱くが如き様を成している。遥か遠くを見やれば、淡水河はまるで一本の糸のようで、蛇行しながら流れ下る。下流になるにつれその幅は増し、ついには海に注ぐが、その海は空に連なって雲霧の掛かる彼方に消えてゆく。

右手に見える観音山は水の寝台に半ば横臥し、脚を空の雲深くに伸ばした感がある。その胸の前には家屋や通りが所狭しと並んでいるが、そこには日々の営みにおける人間の諸々の情が渦巻き絡み合っていることであろう。生老病苦がどれほどの人々の上にのしかかっているであろうか。愛と憎しみ、恩と仇、出会いと別れ、これらがどれほどの人々の間で交差しているであろうか。結局は華やいだ賑わいは数知れぬ明かりとともに消え去り、すべては一場のはかない夢と化してしまうことになる。

山は変わることなく常に在り、水も変わることなく常に在る。そういう中で無常なるもの、それはこの人間社会である。ちょっとこう思ってみたところ忽ち自分の中に澄み切った魂と水の如き優しい心が宿るのであった。

〔41〕自然治癒

溪谷の向かいの傾斜地に崩れ落ちた一角があったのだが、今回帰って来てみるとそれは跡形もなくなっていた。

去年の夏、台風は来なかったが、長雨があり、その時の土砂降りで斜面の一箇所が崩れ、黄土層が剥き出しになってしまった。鮮やかな緑を成す山がここだけは目障りで仕方が無かった。大自然が脆くて弱いものであり、大自然がこうだから人はなおさらのことだと思ったものである。

だが、一年足らずで黄土層は消えている。周りの林が生い茂ってそれを完全に覆い尽くしてしまっ

たからなのだろうか。それとも黄土層そのものに多くの植物が新しく生えたからなのだろうか、判然とはしない。草木は青々とし、命の営みに寸分の狂いもなく、かつて傷を負った痕跡は全く見て取れないのである。

天が大地に与えた最も素晴らしい贈り物、それは自然治癒力であるが、このことは人にあっても同様である。どんな傷口であれ、その箇所をそっとしておく限り時間というものがそれを次第に癒してくれるのである。この恩恵を受けることで私達は悲しみを喜びに変えることができるし、倒れても再び起き上がり前に歩む力を取り戻すことができるわけである。

〔42〕夢の住まい

ランの花栽培をしたいと言う友達夫婦に付き合っ
てそのための土地を見に出掛ける。

車は真っ直ぐ山の中に向かう。幾重にも連なる山並みは何日も降り続いた雨に洗われて実に綺麗さっぱりした表情を見せ、生き生きと輝くその様は見る者を心底から好きにならしめる。

山の中には空家がたくさんある。荒涼とした物寂しさは覆い隠すべくもない。もっと色鮮やかな緑の小山ですらネオンの惹き付ける力にはどうやらかなわないほどである。それでも私は十分納得の上で自分にのみしかかっている肩の荷を下ろし、山中に一つ小さな木の家を探してそこを住み処としたい。そして‘夢の住まい’から毎日山を見、雲を眺め、自分の夢を紡ぎ、ただただ純粹に己の生を営むことにしたい！

私は山が好きである。いつか私がこの世と永久の別れをしたなら、私の遺骨は誰にも知られずにそっと山の中にまいて欲しい。山だけが私の行き先を知っていてくれさえすればそれでよいのだから。

〔43〕高きに登る

樹のない山を一面覆っているのは身長半分ぐらいのススキである。風が吹けばそこには見事なまでの韻律美が形作られる。

車は切り立った険しい山道を這うように登る。ススキは潮が次から次へと押し寄せるが如く山道の両側に迫る。私達の車は風に乗って進む。まるで瑞雲がむくむくと膝下から沸き起こるような感覚に囚われる。

山頂に着く。空は千尋の大海のように底の知れない深さを有し、風はすさまじきことこの上なく、雲は飛ぶように速く流れている。大都会台北はと言うと一つ一つのはっきりした豆粒状の集合に外ならない。

人が日々生活を営む世界はすでに一枚の地図に凝縮され、見慣れた家や仕事場はどれも地図上の一つの小さな点と化してしまっている。そのため探し当てることは容易であったり困難であったりする。かつて拘泥りをもったもの、恋い慕ったもの、捨て難く忘れ難いもの、こういった命と歳月の証しは地図の上では跡形なく、手掛かりすらも見出だすことができず、このことに心中一驚を禁じ得ない。

無限の天地にあっては私自身風化して石となるばかりである。

〔44〕悔い無し

美しい山、水、流れる雲を目にした時はいつまでも見続けていたいという気持ちが強く働くものであるが、そうなるためには見る側の心が潤っており、ゆったりと満ち足りていることが必要で、さもないと山も水も雲も美しい姿でこちらを魅了することはない。自然とそれに対する自己、そのどちらかにでも美的要素が欠けておれば他方を裏切ることになってしまう。

この世において、親しみと愛おしさを感じる心とか、後ろ髪を引かれ未練が断ち切り難い情愛の念といったものもすべてこの類いに外ならない。ある時間と空間を共有する場で巡り会った者同士がお互い心をも許し合い、双方の情が深く絡まって離れられなくなるというのは正にそうしたことである。青い山を目にして何と美しく愛らしいことかと思えば、山の方でもこちらのことを同様に見ているであろう、それと似た関係だと言えよう。

これがもし双方の擦れ違いで終わるのならばいつまでも悔恨の情が残ることは免れないのではなかろうか。

あらゆる事や物や情愛は一切が求めるものではなく巡り会うものとしての機縁を内に含みもっているように思う。その機縁を有し、享受するなら、得難き故にそれを大切にするものだから仮に別れ離れるようなことになっても何ら悔いはないというものである。

注：上の〔1〕～〔44〕のそれぞれについて中国語の原題を以下に記しておく。

- | | |
|-----------|-----------|
| 〔1〕 回帰 | 〔2〕 走入自然 |
| 〔3〕 天地四重奏 | 〔4〕 四季 |
| 〔5〕 夜 | 〔6〕 晨光 |
| 〔7〕 蠟染大地 | 〔8〕 山的呼唤 |
| 〔9〕 山水本無情 | 〔10〕 初霽 |
| 〔11〕 冬日 | 〔12〕 溪的流響 |

- | | |
|--------------|-------------|
| 〔13〕 看山 | 〔14〕 這樣的月夜 |
| 〔15〕 剪影 | 〔16〕 神馳 |
| 〔17〕 五月相思 | 〔18〕 山的變奏 |
| 〔19〕 天籟 | 〔20〕 雨蟬 |
| 〔21〕 訪客 | 〔22〕 聽聽那鳥聲 |
| 〔23〕 回響 | 〔24〕 下雨的晚上 |
| 〔25〕 無法伝通的…… | 〔26〕 有花香的夜晚 |
| 〔27〕 華年 | 〔28〕 桐花 |
| 〔29〕 會說話的樹 | 〔30〕 落葉 |
| 〔31〕 曼陀蘿 | 〔32〕 樹是鳥的家 |
| 〔33〕 鋸樹 | 〔34〕 鋸樹的老頭 |
| 〔35〕 秋實 | 〔36〕 廢園 |
| 〔37〕 鳥巢 | 〔38〕 自己的流域 |
| 〔39〕 山的迷失者 | 〔40〕 繁華 |
| 〔41〕 自愈 | 〔42〕 夢坊 |
| 〔43〕 登高 | 〔44〕 無憾 |

(了)